C'n

SCENE
NEWS
CHIBA CITY MUSEUM OF ART

vol.64

Topics

須田悦弘展
須田悦弘による江戸の美
展覧会速報　仏像半島一房総の美しき仏たち

須田悦弘《泰山木：花》1999年 千葉市美術館蔵

館長のつれづれだより ～美術館を楽しんで～

この夏、今年は9月になっても厳しい残暑が続きましたが、千葉市美術館では、三つの展覧会を行いました。7月から8月にかけては「どうぶつ大行進」。9月初旬には「ブラティスラヴァ世界絵本原画展―広がる絵本のかたち」と「特集展示｜斎藤義重：1980年代以降を中心に」を開催し、この原稿を書いている今も後者の二つは開かれています。

一つ目の「どうぶつ大行進」では、当館所蔵の作品や当館に寄託していただいている作品で、動物たちのさまざまな姿を描いた絵画（彫刻もありましたが）のなかから、設定されたテーマにふさわしさものを選んで展示しました。

「ブラティスラヴァ世界絵本原画展」は、すでにお知らせしたように、スロバキア共和国の首都ブラティスラヴァで２年に１度、世界中から絵本や原画（イラストレーション）を募って行われる国際美術展（ビエンナーレ）、通称BIBの第23回展（2011年）での、グランプリをはじめとする受賞作品、出品された日本人作家の作品、スロバキア共和国のイラストレーションの現在と活躍する幅広い層の作家たちを紹介するなどの展示となっています。BIBにはおよそ30年の歴史があり、これにちなむ企画展は、千葉市美術館でも2005年，2008年、2010年と過去に3回行っていますので、皆さんのなかには、おなじみの方もいらっしゃると思います。

こうした外国から持ち込まれる定評のある作品を集めた展覧会は、当然費用もかかりますが、同時に日本の多くの人々にご覧いただく機会とするために、幾つかの美術館と共同主催し、各館を巡回するというケースが少なくありません。「ブラティスラヴァ世界絵本原画展」もその一つといえましょう。会期の初めには、スロバキア共和国のドゥラホミール・シュトス駐日大使もお越しくださり、熊谷市長をはじめ市職員、美術館および展覧会関係者たちと親しく懇談されるなど、国際交流の実をあげたことも、ここに付記して置きたいと思います。

「特集展示｜斎藤義重」展は、館蔵品を軸に展覧会の企画の意図や主題を明確にし、その内容を豊かにするために、他の美術館や―この展覧会では富山県立近代美術館ですが―、個人のコレクターから貴重な作品を借用して展示しています。

（上）「どうぶつ大行進」展示室の様子

このように一口に展覧会と言っても、美術館の所蔵する作品のみで行うもの、他所（よそ）から日ごろなかなか観ることの出来ない作品を借用して行う特別企画展、館蔵品を中核に借用作品も加えて行う展覧会など、いろいろな形態で展覧会は企画され、実施されています。しかし、基本はその企画の内容が、美術展として豊かであり、また、来館して下さる方たちにとって何らかの興味や関心をそこから呼び起こさせるような、そして、なによりも楽しんで観ていただくためには、どのように作品をあつめ、どのようにして作品の魅力を引き出す展示とすれば良いかを展覧会を担当する学芸員は常に考えています。

例えば「どうぶつ大行進」は、寄託品を含む館蔵品だけで構成した展覧会でしたが、千葉市美術館にこんな作品があったのかといまさらながら改めて気付かされたり、この作品とこの作品とを並べて陳列してみると、それぞれにこんな魅力があったのかと驚き、おもわず引き込まれるように、わたしも2時間以上かけて会場を一巡しました。夏休み中ということもあり、お子さんの来場を期待しましたが、館内で配布したクイズ・ワークシートを片手に、親子づれ、あるいは児童・生徒のグループが、楽しげに話しあい、難問の解答を求めて会場内を行き来する姿が見られました。

展示された作品を前に、親子が、夫婦が、友人や恋人たちが、あるいは先生に引率された子供たちが、楽しげに語り合いながら鑑賞する姿は、欧米の美術館ではごく普通に見られます。美術館が市民のためのもの、こころを安らげる憩いの場所であるというのならば、もっと多くにみなさんに自由に、また気軽に美術館へ足を運んでいただき、身近にある素敵な場所として活用して頂きたいと思うのです。

10月末からは「須田悦弘展」が開催されます。須田悦弘の、日本の伝統を想起させる木彫という手法と花というモチーフにこだわりつつも、それらをインスタレーションという新しい手法と結びつける独創的な造形活動は、現代アートのみならず、幅広い領域から注目されています。評価の高い代表作を含む大作で構成される今回の展覧会は、見ごたえのあるものとなるでしょう。そのあと引き続き、2013年1月4日からは新春を寿ぐにふさわしく、ボストン美術館の収蔵するたくさんの美しい着物を展示する「Kimono Beauty―シックでモダンな装いの美　江戸から昭和―」が開催されます。

千葉市美術館は、魅力的な展覧会を次々に企画・準備して、多くに皆さんのお出でをお待ちしています。

［館長　河合正朝］

須田悦弘展

Yoshihiro Suda

須田悦弘(1969-)は、1993年のデビュー以来、花や雑草の彩色木彫を作りつづけてきました。通常、それらは展示ケースに入れられることなく、作者が魅力的と感じた様々な場所にむき出しのまま展示されます。このように作品単体を見せるのではなく、作品を取り囲む空間も含めて作品とするような手法を、インスタレーションと呼びます。日本で古くから親しまれてきた木彫という技法にこだわりつつも、それらをインスタレーションという現代アートの新しい手法で見せるところに、この作家の独自性があるといえます。本稿では、この木彫とインスタレーションという２つの側面から、須田悦弘の作品について解説していきたいと思います。

■はじめに木彫ありき

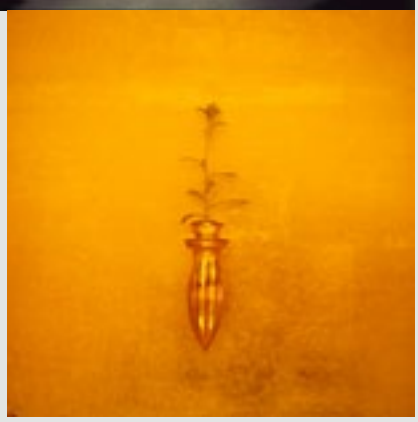
須田悦弘の木彫を今回の展覧会ではじめてご覧になった方もいらっしゃると思いますが、そのリアルさに驚かれたのではないでしょうか。彼は、現代アートのなかでは少数派といえますが、写実にこだわり続けてきた作家です。しかしながら、ただやみくもにリアルさだけを追い求めてきたわけではありません。作品を注意深く見ると、彫刻刀の跡や小さな穴が随所にあり、作者が木彫の質感や手仕事の風合いを意識的に残そうとしていることが分かります。「もっとリアルにしたいという欲求がある反面、やっぱり木で作ったんでなければ出ない良さみたいなものも出せればという風に考えてやっています」と彼自身も述べています。

高度で繊細な木彫の技術を身につけている須田ですが、多摩美術大学在学中は、グラフィックデザイン学科に在籍していました。大学１年のとき、授業の課題でスルメイカの干物を本物そっくりに模刻したことがきっかけで、木彫の魅力にとりつかれてしまったそうです(図1)。卒業制作もグラフィック系の作品ではなく、障子でつくった小屋のなかに収められた朴の花の木彫でした。現在に近い作風が、すでにこのとき確立されていたのです。彼は学生時代から慣れ親しんできたこの技法に深い愛着を感じており、「木を彫って何かを作るという行為自体がものすごく好き」だと語っています。単にリアルな花をインスタレーションで見せるだけであれば、現在では木彫以外にも、より手軽で便利な素材や技法がいくらでもあるはずです。にもかかわらず、あえて制作に高い技術と多くの時間を要し、取り扱いが難しく壊れやすい木彫にこだわり続けているところが、この作家ならではの個性といえます。

(図1) 授業で模刻した《スルメ》(1988)

■須田悦弘のインスタレーション　空間を作り出す－空間を見いだす

大学卒業後デザイン会社に就職した須田でしたが、１年で退社し、その年の末には最初の個展を行います。このとき貸画廊に空きが見つからず、やむを得ず考えだした苦肉の策が、リヤカーのような箱状の車を作り、銀座のパーキング・ロットに停めて、そのなかで作品を見せるという大胆な方法でした(図2)。この車の内部は総金箔貼りで、銀座の街角で見つけた雑草の小さな木彫が、奥の壁にたった１本だけ展示されていました(図3)。当時、美術館やギャラリーの外で作品を発表する試みが流行していたこともあって、この《銀座雑草論》(1993)は少なからず評判を呼び、デビュー作にして『美術手帖』の展評にも取り上げられます。



(図2)《銀座雑草論》外観
(図3)《銀座雑草論》内部

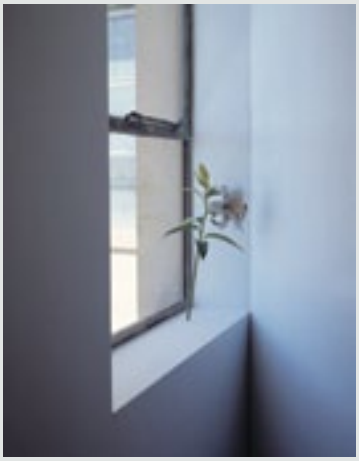
（図4）《東京インスタレイシヨン》内部

ここで注目すべきは、須田が作品にあわせて、作品を展示する空間も自作していることです。作品を単体で見せるのではなく、作品が置かれた空間も含めて見せるというインスタレーションの理念が、既にデビュー時から明確に示されていたのです。続いて屋外の駐車場を使って発表された《東京インスタレイシヨン》(1994、図4)でも、作品のためにつくられた専用の建造物のなかに、朴の花と実の彫刻が展示されました。須田はこのあと、屋外での作品発表はやめてしまいますが、美術館やギャラリーの展示室内で、作品専用の建造物を自作するタイプのインスタレーションを幾度か試みています。今回の展覧会では、この《銀座雑草論》と《東京インスタレイシヨン》から、代表作の《泰山木：花》(1999、表紙)と《睡蓮》(2002、図5)、新作《芙蓉》(2012、図6)にいたるまで、このタイプの作品が５点展示されます。

（図5）《睡蓮》

（図6）《芙蓉》

初期には作品専用の「空間を作り出す」機会が多かった須田ですが、次第に《百合》(1998、図7)の場合のように、展覧会場内に自分好みの「空間を見いだし」、そこに木彫を設置する機会が増えていきます。つまりオーダーメイドの空間ではなく、レディメイドの空間を利用する方向に進んでいったのです。確かに、展覧会のたびに作品専用の建造物を作るためには、かなり多くの時間と費用を必要とします。美術館の個展や海外の大規模なグループ展ならいざしらず、通常のグループ展やギャラリーの個展のたびに、そのような大掛かりな造作を行うのはあまり現実的ではありません。また作品単体での展示が増えた背景には、経済上の理由以上に、より明確な芸術上の理由がありました。美術館やギャラリーの展示室にせよ、その外側のロビーや廊下、あるいは古い建物の片隅にせよ、レディメイドの空間には、オーダーメイドの空間の完璧さとは異なる、意外な魅力が秘められているからです。建築の構造上やむを得ず出来てしまったすき間のような場所、展示室の隅、床や天井に近い場所こそ、須田が好む「何か足らないか、何か過剰か、隙のある空間」なのです。結果として、階段の手すりの裏や庭池の石の上など、よほど注意深く見ないと見落とされてしまうようなところに作品が設置されることも珍しくありません。彼の木彫は、そういった普段は顧みられない、通常は作品が展示されることがない空間とも美しく共鳴します。



（図7）《百合》

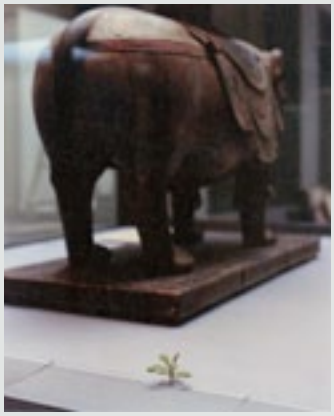
「空間を作り出す」、そして「空間を見いだす」という２つの選択肢を使い分けている須田ですが、この2つの選択肢のあいだに「そんなに大きな差があるようには感じない」と語っています。要は作品を設置する作者好みの空間があれば良いのであって、それがレディメイドの空間であれ、新たに設計されたオーダーメイドの空間であれ、決定的な違いはないわけです。まず自分好みの空間を用意すること、そしてその場にふさわしい木彫を制作すること、最後にその木彫を中心に美しい空間をつくること。このプロセスは不変なのです。木彫は作者が選んだ空間を美しく演出すると同時に、その空間の存在を観客に伝える目印の役割も果たします。

前章で述べたように、須田は木彫をいう技法に並々ならぬ愛着を持ち続けてきました。一方で、木彫は作者が見いだした空間に置かれたとき(インスタレーションされたとき)、はじめて作品として完成を見ます。したがって、あるひとつの木彫が別の機会に別の場所に展示された場合、全く新しい作品に生まれ変わったということができます。ひとつの展示が終わっても木彫自体は残りますが、多くのインスタレーションがそうであるように、須田が見いだした空間と木彫の取り合わせは、展示が終われば解消される一期一会の関係性を持つのです。

■ 古美術とのコラボレーション 「須田悦弘による江戸の美」

「須田悦弘 展」の会期中、７階展示室では、「須田悦弘による江戸の美」展を開催します。これは千葉市美術館の江戸絵画・版画コレクションのなかから須田自ら名品を選び、現代作家ならではの視点で構成した所蔵作品展です。もちろん皆様も期待されているように、会場の随所で、自作の木彫と出品作品を組み合わせた展示も行います。いずれにせよ、通常の江戸絵画の展覧会とはかなり雰囲気の違った、独特の会場構成になると思います。

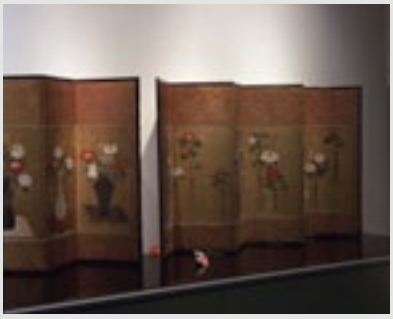
須田は2000年、大倉集古館で開かれた「拈華微笑（ねんげみしょう）－仏教美術の魅力－」展で、同館所蔵の国宝《普賢菩薩騎象像》のケース内に小さな《雑草》を忍ばせました（図8）。温湿度管理が行き届いているはずの国宝のケースの中に、何故雑草が生えているのだろうか。多くの観客が意表を突かれ、少なからず衝撃を受けたあと、事情を知って笑みをもらしたことでしょう。作者自身「私にとってターニング・ポイントとなった展示のひとつ」と述べているように、古美術作品と自作を組み合わせた展示は、須田のインスタレーションの可能性を大きく拡げました。これ以後、ときには室町時代の茶器と、ときには江戸時代の屏風や掛軸と自作を巧みにからめた展示が、幾度が行われてきました。



（図8）《普賢菩薩騎象像》と《雑草》

2002年、千葉市美術館の「ジ・エッセンシャル」展に4人の出品作家のひとりとして招待されたときも、須田は当館に寄託されていた《椿図屏風》（個人蔵）と自作の《椿》(2002)を組み合わせたインスタレーションを行いました（図9）。江戸時代の絵画からあたかも赤と白の椿がこぼれ落ちたかのように、屏風のわきに2点の木彫が配されました。屏風という東洋絵画のメディアは、絵でありながら、実際の生活空間に置かれる工芸品としての側面ももつため、額縁によって絵画の内と外が厳格に区別される西洋絵画とは、かなり性格を異にします。仮に油彩で描かれた花の静物画の前に須田の木彫を置いたとしても、あまり絵画からこぼれ落ちたようには見えないでしょう。もちろん須田の花が、木彫という日本古来の技法で作られ、日本画の画材で彩色されていることも、このような展示が効果的に成立する大きな理由であることは間違いありません。この《椿図屏風》と《椿》のインスタレーションは、今回の展覧会でも再現されますので、皆さまの目でその軽やかなおもしろさをご確認いただければと思います。これ以外にも、「須田悦弘による江戸の美」展で当館の古美術作品と組み合わせるべく、現在作家が新作を制作中です。通常のインスタレーションとは一味違った江戸絵画とのコラボレーション展示を、この機会にぜひ体験してください。

［学芸員　水沼啓和］



（図9）《椿図屏風》と《椿》

関連イベント

■須田悦弘公開制作
須田悦弘がまる1日かけて《雑草》を公開制作し、完成後、展示室内に設置します。作家の精密な木彫技術を直接間近でご覧いただけます。（作業中に随時休憩をとることがあります。時間中であれば、自由に観覧可能です。）
11月11日（日）10：00～17:00／11階講堂にて／観覧無料

■須田悦弘講演会（※往復ハガキによる申込制／10月31日必着）
スライドを用いて、須田悦弘が自作を解説します。
11月18日（日）14：00より／11階講堂にて／定員150名／聴講無料
※詳しいお申込方法はチラシまたはホームページをご覧ください

■映画上映会「利休」
監督：勅使河原宏　脚本：赤瀬川原平（1989年 松竹、135分）
12月9日（日）14：00より／11階講堂にて／先着150名／聴講無料

■市民美術講座「須田悦弘―空間を見いだすこと」
11月24日（土）14：00より／11階講堂にて／先着150名／聴講無料
講師：水沼啓和（当館学芸員）

■市民美術講座「日本美術にみる内と外」
12月8日（土）14：00より／11階講堂にて／先着150名／聴講無料
講師：河合正朝（当館館長）

須田悦弘 展

2012年10月30日(火)▷12月16日(日)
［休館日］　11月5日（月）、12月3日（月）
［観覧料］　一般 1000（800）円、大学生 700（560）円
※小・中学生、高校生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料
※（　）内は前売、団体20名以上、および市内にお住まいの60歳以上の方の料金
※前売券はローソンチケット（Lコード：38099）、セブンイレブン（セブンコード：019-162）、千葉都市モノレール「千葉みなと駅」「千葉駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口（12月16日まで）にて販売

同時開催　須田悦弘による江戸の美 展

［観覧料］　一般 200（160）円、大学生 150（120）円
※（　）内は団体30名以上
※ 千葉市内在住60 歳以上または千葉県在住の65歳以上の方、小・中学生、高校生、および障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料
※「須田悦弘 展」ご観覧の方は無料

須田悦弘の木彫－その制作プロセスに迫る

現代アートの世界で木彫を試みる作家は、意外に多く存在します。長い伝統を持つこの技法は、いまなお大いなる創造の可能性を秘めているのです。特に近年は、舟越桂、三沢厚彦など具象表現を行う木彫作家が目に付きますが、そのなかでも須田悦弘は、一貫して写実表現を追求してきた作家として独自の地位を占めています。今回の展覧会にお越しになる方も、このリアルな彩色彫刻がどのように作られているかに、とりわけ関心をお持ちのことでしょう。そこで本稿では、須田の木彫制作法について簡単に解説したいと思います。

大学ではグラフィックデザイン学科に在籍していた須田ですが、驚くべきことに在学中から現在にいたるまで、人から直接木彫の技術を教わったことはないといいます。「仏像の彫り方」のような技法書を読んだり、彫刻科の友人に教本を借りたりして、完全な独学でこの技法を習得したそうです。その意味でこの作家の技術は、必ずしも木彫の伝統に直結しているわけではないのです。

デビューから2作目の《東京インスタレイシヨン》(1994)以降、須田は朴の木を素材に作品をつくり続けてきました。このとき知人の紹介で朴の丸太１本を購入し、その後もう１本追加購入しただけなので、20年近くにわたり、これら2本の丸太から少しずつ部材を切り出して作品をつくってきたことになります。木版画などに用いられる朴材は、繊細な細工に適しており、作家本人も、「非常に彫りやすいというか、自分に合っている感じがする」と述べています。

（図1）須田が使う工具一式。左側に新作《芙蓉》と彫りかけの葉が見える。

須田は多くの場合、最初に展示する場所を見てから、その空間のためにどのような花を彫るかを決めます。椿や朝顔、薔薇やチューリップなど、日本で身近にみられる花が選ばれることが多く、高山植物や外国の珍しい花のような、作者自身もあまり見たこともない特殊な花が選ばれることはまれです。また原美術館の個展(1999)のときに、同美術館のシンボルツリー的存在だった泰山木がモチーフに選ばれたり、アサヒビール大山崎山荘美術館の個展(2002)で、美術館の池に咲く睡蓮が彫られるなど、展覧会を開く場所にゆかりのある花が選ばれることもあります。制作を始めるにあたり、可能な場合は現物を入手して、側に置き手本とします。現物が入手出来ない場合はもちろんですが、現物が入手できる場合でも、図鑑等の写真もあわせて参照するそうです。けれども手本となる花や草をありのままに写すのかというと、必ずしもそうではありません。須田がイメージするその植物の理想的な姿に近づくように、いくつかの手本や資料の良い部分だけを集めて、オリジナルの花を作り上げていくそうです。準備が整うと、スケッチやデッサンを行うことなく、いきなり木を刻みはじめますが、精密で複雑な須田の彫刻は、一木造りではなく、いくつかのパーツに分割されて彫られます。小型で一見シンプルに見える朝顔のような花でも、20個くらいの小さな部品から構成されるそうです。花びらやめしべやおしべもそれぞれ別パーツなので、花の部分だけでも少なくとも数個以上のパーツに分割され、細い茎も、通常、数個以上の部品を継いで作られます。最初に大きな木材を万力にはさみ、小型のノコギリで各パーツの大きさに切り分けたのち（図2）、その細かい部材を手に取って、彫刻刀やノミで掘り進めていきます。彫りのプロセスが終了したのち、筆を使って、個々のパーツを日本画の画材である岩絵具や水干絵具で彩色することになります。須田の花は自然に近い色に見えますが、必ずしも現物に忠実に彩色されているわけではありません。ここでもやはり、本物の正確な色彩よりも、作者がイメージする色彩が優先されるからです。彩色後、それぞれの部品を木工用アロンアルファで接着し、ようやく出来上がりとなります。

（図2）細かく切り分けられた朴材。

木彫はやればやるほどうまくなるタイプの技術なので、作品制作に必要な時間も、昔に比べればかなり短くなってきたといいます。たださすがに手の込んだ花などは、制作に１ヶ月以上かかることもあり、一方で小型の雑草などは、１日で完成させることもできるそうです。本展の関連イベントとして行う「須田悦弘 公開制作」でも、まる1日かけて1本の雑草を公開制作し、展示室内に設置する予定です。本稿で説明した須田の精密な木彫技術を、直接間近で見られる好機ですので、ご興味をお持ちの方はぜひご参加ください。

［学芸員　水沼啓和］

（上）プレチラシ案はこんな感じ

展覧会速報！

2013年春、千葉市美術館が**仏像**でいっぱいに？！

1999年秋、千葉市美術館は展覧会「房総の神と仏」を開催し、房総の宗教美術を通覧してご好評をいただきました。以来10数年を経た2013年春、千葉市美術館が改めて仏像の展示を試みます。メインタイトルの「仏像半島」には、仏像が質量ともに豊かな、恵まれた半島という意味を込めました。その名のとおり展示室には、房総半島各地から選りすぐられた仏像百余体が集結。近年見いだされた諸仏や最新の研究成果にも目を配り、房総の仏教文化の本質を探ります。また造立当初の雰囲気を再現すべく、仏像群を立体的に配置。いつもの当館とはひと味違った、劇的な展示空間を体感していただきます。

加えてご注目いただきたいのは関連イベント。声明公演の開催や仏像たちの故郷を訪ねるバスツアー、連続講演会や仏像コスプレワークショップ、さらには期間限定カフェなど、現在鋭意準備中です。あわせてご期待ください。

房総を代表する諸仏のほか、長らく非公開であった秘仏や新出の仏像を数多く含む、まさに決定版といってよい内容です。燦々と降り注ぐ陽光と緑深き森、そして豊穣な海―。恵まれた自然に守られ、東国らしい大らかな野趣と意外なほどの洗練を示す房総の仏像たち。その魅力にふれるまたとない機会を、どうぞお見逃しなく！

［学芸員　西山純子］

WiCAN2012 プロジェクトルーム・リノベーション・プロジェクト

「プロジェクトルーム・リノベーション・プロジェクト」とは、千葉アートネットワーク・プロジェクト（WiCAN）とアーティスト・住中浩史が協力して、美術館1階にあるプロジェクトルーム（情報コーナー）の空間を、新たな交流の場として“つくりかえる”プロジェクトです。

メンバーは6月中旬から空間の改装のアイデア出しを行い、7月には「来場者から何らかの行為を誘発する装置」を考え、木材を使って作りました。住中さんと千葉大生たちがみっちり現場に通い詰めた約1週間の作業の結果、ステージやらせん階段などが完成しました。

その空間が実際どのように使われるのか、何を引き出すのか、プロジェクトは次の段階へと進もうとしています。このニュースが発行される頃、10月21日（日）には、開催中の企画展「ブラティスラヴァ世界絵本原画展　広がる絵本のかたち」の関連イベント「アート・ブック・サーカス」があり、その一環として行うパフォーマンス（えほん読み、即興音楽など）の舞台として、プロジェクトルームが使われることになっています。出演者との現場打ち合わせでは、「ここならこんな感じで、こんなことができそう」と、イメージが膨らみました。さて、当日はどのような「場」が出現するのでしょうか。

WiCAN2012では、他にも、「須田悦弘展」会期中に市内の小学校と共同で行う鑑賞プログラムの開発や、市内の公共空間における展示の企画・実施、WiCAN卒業生や社会人による企画「Side-C」などに取り組んできました。12月15日（土）には、美術館にて、今年度の活動を半ばで振り返るシンポジウムを予定しています。

★ 詳細は、千葉アートネットワーク・プロジェクトのサイトをご覧ください。（http://www.wican.org/）

［学芸員　山根佳奈］

（右）プロジェクトルームの様子

2003年4月にボランティア第一期のメンバーが活動を始めてから、まもなく10年が経とうとしています。当初20名弱の養成講座修了者でスタートした「千葉市美術館ボランティアの会」は、2006年と2011年にそれぞれ新しいメンバーを迎え、現在27人で活動しています。

手探りで始めたギャラリートークは展覧会ごとの定例イベントとして定着し、会期中初回を除く水曜日ごとに、週替わりのトーカーがお客様をご案内しています。企画展でのギャラリートークの準備は時間との戦いでもあり、担当学芸員によるレクチャーや情報提供、現場で学ぶ機会への参加という一連の流れに皆が参加できるよう、また、資料の効率的な利用のために、展覧会ごとに連絡係という役割が設けられました。

また、小さなお客様たちを迎える際の欠かせない案内役・鑑賞リーダーですが、これも始めてみるとわからないことばかりでした。そこで、同じような活動をしている他の美術館へ皆で見学に行ったりし、学習会というかたちで活動の目的を共有し課題や悩みを解決しあう場が生まれました。

当館のコレクションの中心となっている版画作品(浮世絵・近代版画)への理解と親しみをもっと持ってもらいたいという気持ちから始まった木版画多色摺り体験のワークショップですが、これも今では楽しみにしているお客様の多い定番イベントとなっています。木版画ワークショップの企画運営を担うグループとして、「もくもく会」というゆるい集まりができあがり、ボランティア自らも木版画づくりに取り組みながら、その楽しみを伝えるための工夫を考えてきました。市民向けの年賀状制作講座を企画したり、最近では鑑賞リーダーが子どもたちに多色摺りの仕組みを説明するためのツールが「もくもく会」の協力でつくられ、活用されています。

これらの他、美術館へのアクセスを考えるグループの結成など、10年の間つねに「いま必要なもの」が探求され、それに基づいて活動が生まれてきました。これから先の10年も、日々の活動の中から生まれてくるであろう新しい試みを楽しみに、美術館もまた彼らとともに歩みを進めて行けたらと思います。

［学芸員　山根佳奈］

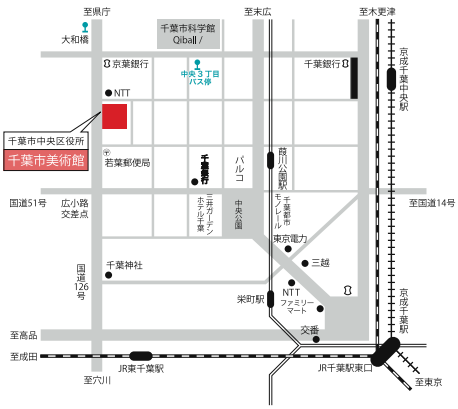
◎市民美術講座のお知らせ

「市民美術講座」は、市民のみなさまに千葉市美術館のコレクションを紹介し、作品についての理解を深めていただくものとして、2004年度より実施しております。

今年度下期は右記の内容で行います。聴講は無料ですのでお気軽にご参加下さい。

○第7回	11月24日(土)	「須田悦弘—空間を見いだすこと」 ［講 師］水沼啓和(当館学芸員)
○第8回	12月8日(土)	「日本美術にみる内と外」 ［講 師］河合正朝(当館館長)
○第9回	1月19日(土)	「文人画再発見！」 ［講 師］伊藤紫織(当館学芸員)
○第10回	2月9日(土)	「海外に渡った日本美術」 ［講 師］田辺昌子(当館学芸課長)

［時 間］14：00より(開場は30分前)［場 所］11階講堂［定 員］先着150名(入場無料)



［開館時間］
10：00 -18：00（毎週金・土曜日は20：00まで）
＊入場受付は閉館の30分前まで
［交通案内］
◎JR千葉駅東口より
○徒歩約15分
○バスのりば7番より大学病院行、または南矢作行にて
「中央3丁目」下車徒歩3分
○千葉都市モノレール県庁前方面行「葭川公園駅」下車徒歩5分
◎京成千葉中央駅東口より徒歩約10分
◎東京方面から車では、京葉道路または東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ、貝塚IC下車、国道51号を千葉市街方面へ約3km、広小路交差点近く
◎地下に駐車場があります

［編集・発行］
千葉市美術館
〒 260-8733 千葉市中央区中央 3-10-8
TEL. 043-221-2311　FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733, Japan
http://www.ccma-net.jp/
［発行日］2012 年 10 月 22 日
［印　刷］株式会社恒陽社印刷所

千葉市美術館
Chiba City Museum of Art